北星学園大学大学院社会福祉学研究科 北星学園大学大学院論集第２号（通巻第14号）（2011年）・抜粋

恋愛関係崩壊後の関係における交際内容に関する研究

――Post-dating relationship と恋愛関係、異性友人関係との比較――

山　口　　司

恋愛関係崩壊後の関係における交際内容に関する研究
──Post-dating relationship と恋愛関係、異性友人関係との比較──

A research on Post-dating relationship
──Comparison with romantic relationship and opposite-sex friendship──

山　口　　司

【問題・目的】

恋愛関係の崩壊、つまり、失恋は多くの青年が経験している出来事であると同時に極めてショッキングな出来事である。黒崎ら（2008）は、そのような失恋という対象喪失が原因で症状を呈した学生の症例を報告している。また、警察庁の統計（2009）を見ると、男女問題によって自殺した1,121名のうち青年期に相当する29歳までの自殺者数は、441名（約40%）で、中でも失恋による自殺者がもっとも多いことがわかる。このことからも、失恋が青年期にとっていかにインパクトな出来事であるか伺える。

本邦における失恋研究は、失恋の実態や失恋後の感情に関する研究が多い（飛田，1997；大坊，1988；宮下ら，1991；栗林，2001）が、近年は、失恋と社会的スキル（堀毛，1994）、失恋からの立ち直り（石本・今川，2001；山下・坂田，2008）や失恋に対するコーピング（和田，2000；加藤，2005）など、失恋に対する具体的な対応を扱う研究が増えている。そうした中で、増田（2001b）は、関係解消研究への新たな視点として、対人関係の修復という概念について述べ、対人関係の修復のひとつとして関係の『再開』つまり復縁について述べている。増田（2001a,b）は、復縁の１つとして恋愛関係崩壊後に再定義された友人関係として、Post-Dissolution Relationships という関係について述べている。同様の観点から、Metts, Cupach & Bejlovec(1989) は、恋愛関係の崩壊後の関係の再定義に焦点を当て、恋愛関係の崩壊は関係の終結とは別に関係崩壊後に友人関係へ関係を再定義する可能性を示唆している。しかし、そういった恋愛関係崩壊後に再定義された友人関係についての研究は少ない。

Post-Dissolution Relationship 研究について

Post-Dissolution Relationship と は、『関係崩壊後の関係』であるが、狭義では、Post-divorce relationship と Post-dating relationship の２つの Post-Dissolution Relationship が存在すると思われる。Post-divorce relationship は、離婚後の関係であり、主に家族社会学などで盛んに扱われている（e.g., Ahrons，1994）。一方の、Post-dating relationship は、結婚には至らなかった恋愛関係崩壊後の関係である。Post-dating relationship は、多くは無いが恋愛関係や失恋などを扱う社会学や心理学の領域で扱われている（Foley&Fraser，1998；Schneider&Kenney，2000；増田，2001a，2006；Masuda，2006）。Post-Dissolution Relationship が内包または

キーワード：恋愛関係の崩壊、PDR、異性交際

類似している用語として、Post-divorce relationship（Arons，1994），Post-dating relationships（Foley&Fraser，1998），Post-dissolutional relationships（Lannutti&Cameron，1999），Post-disengagment friendship（Mettsら，1989）など多様な用語が研究者によって使用されている。本研究では、青年の多くが経験し、大きなインパクトを与える失恋という現象に注目することから元恋人同士の関係であるPost-dating relationshipを対象とし、その際、『恋愛関係終結後に同一パートナー同士で継続された結婚前の元恋人同士による友人関係』という増田（2000）の定義を用いる（以下、本研究では、断りが無い限り、Post-Dissolution Relationship とは、Post-dating relationship（s）を指し、PDRという略式を用いることとする）。

Post-Dissolution Relationshipの研究は、アメリカ合衆国において、離婚後の家族関係、つまり、Post-divorce relationship、特に、子どものいるPost-divorce relationship について、一部の研究者によって注目を集めていたが、子どものいないPost-divorce relationshipや、結婚に至らなかった恋愛関係崩壊後の元恋人同士のPDRについての研究は少ない（増田，2001）。

では、実際にPDRという関係はどのくらい一般的なものなのであろうか。Wilmot, Car baugh&Bayter（1985）は、ロマンチックな関係が終わった後、被験者の61%がPDRを形成していると報告し、Bell（1981）は、被験者の女性の66%がPDRを形成していると報告していた。Kaplan&Keys（1997）では、現在最も親しい異性として男性の被験者の14%と女性の被験者の13%がPDRを挙げていた。また、Schneider&Kenney（2000）は、現代のアメリカ文化においてPDRは一般的な関係であるとし、彼らの被験者の271名中182人、約67%がPDRを保持していることを報告している。また、他の研究においても元恋人同士の友人関係が現実に存在することが報告されている（Masuda，2006；Mettsら，1989）。

PDRの実証的な研究としては、Foley&Fraser（1998）やSchneider & Kenney（2000）、増田（2001a，2006）が挙げられる。Foley&Fraser（1998）は、PDRと自発的な関係にある被験者に対してインタビューを行い、いかにして関係崩壊後互いにPDRに方向付けたか、社会的ネットワークとPDRとの間の影響について尋ね、PDRについての周囲への関係性の説明やPDRに対してどのように振舞うべきかのスクリプトが欠如していることが問題であるとしている。

また、PDRと異性友人関係の比較をしたSchneider&Kenney（2000）は、友人関係のルールの当てはまりやすさ、利益とコストの知覚、包括的な関係の質、ロマンチックな欲求に関して、プラトニックな異性友人とPDRを比較した結果、感情的サポートや信頼、信用を示したり、感情や個人的な問題の開示をしたりするような親密性と自己開示に関連した友人関係のルールは、PDRよりもプラトニックな異性友人でよく当てはまり、プラトニックな異性友人との関係にはより多くの利益を見出し、PDRにはより多くのコストを見出していた。関係の質については、プラトニックな異性友人の方が、PDRより高く考えられ、これらの結果に、全体的に性差は見られなかった。また、ロマンチックな欲求に関しては、プラトニックな異性友人よりもPDRにロマンチックな関与を望み、特に男性は、プラトニックな異性友人にもPDRにもロマンチックな関与が同程度みられ、女性は、プラトニックな異性友人よりもPDRにロマンチックな関与を望んだ。また、相手がロマンチックな関与を望んでいると思うかについては、男性も女性もプラトニックな異性友人が、ロマンチックな関与を持ちたいだろうと思うよりもPDRの方がロマンチックな関与を持

ちたいと思っているだろうと推測していた。以上の結果から、Schneider&Kenney（2000）は、友人関係のルールの当てはまりや知覚された利益やコスト、関係の質、ロマンチックな欲求の希求において、異性友人とPDRの異質性を主張している。

そして、増田（2001a）は、PDRパートナーの新しい恋人との交渉と葛藤について検討している。増田は、自身のPDRについて満足しているアメリカ人大学生・大学院生に対して、「新しい恋人」とはどのような人たちか、「新しい恋人」とPDRはどのように関わっているかについてインタビューを行った。自分/相手の「新しい恋人」とはどのような人たちかについては、4タイプに分類された。Type 1：「PDRの歴史（恋愛関係解消以前の関係）を見てきた人」、Type 2：「PDRの歴史を知らない人」、Type 3：「PDRを敵視する人」、Type 4：「PDRとの関わりを持たない人」であった。自分/相手の「新しい恋人」とPDRはどのように関わっているかについて、Type 1との関わりを象徴するドメイン（発話者自身の用語）は、「禁忌」と「癒し」であり、Type 2との関わりを象徴するのは、「現在のネットワークへの参加と利用」であり、Type 3との関わりを象徴するのは、「嫉妬」であり、Type 4との関わりを象徴するのは、「恋愛関係の条件」であった。これらの研究結果から、PDRの正当性について、「元恋人と付き合う（合わない）のは、今の恋人が怒らない（怒る）から」という言い分けが説得力を持つか否かが、PDRの正当性を巡る議論の争点になるとしている。

また、増田（2001a）は、PDRは心理学の分野では精神保健上不健康なものと位置づけられることが多く、ゆえに、PDRは社会的に望ましい関係であると認識されず、その結果、研究対象とされてこなかったのではないかとしている。そこで、Masuda（2006）では、PDRには、社会的ネットワーク成員へ正当な関係であるというアカウントメイキングが必要であるし、PDRの正当性について検討している。その結果、PDRを正当化させる方略として、以下の5つの方略を挙げている。（1）Irreplaceability of the PDR（相手は人生の一部）、（2）Detachment of the Past（今は昔と別人）、（3）Denial of Traumatic Dissolution（傷つく別れではなかった）、（4）Nullification of Questions about the PDR（問題とするのが変）、（5）Inaccessibility of the Partner（新しい恋人がいる／探す）、この研究結果は、アメリカ人を対象としていたが、増田（2006）では、同様な方略を本邦でも確認している。

これらの先行研究からも伺えるようにPDRという関係の継続には、いくつかの問題（スクリプトの欠如、社会的ネットワークへの正当性認知など）を秘めている事が伺える。そして、PDRが精神保健上不健康なものと位置づけられ、社会的に望ましい関係ではないと認識されているならば、そのような関係にある当事者たちは、戸惑いや苦悩を抱えているのではないか、そのような人たちのためにもPDRに対しての理解が必要であると思われる。しかし、その実態は、まだ十分に把握されているとは言えない。

そこで、本研究は、本邦におけるPDRの存在の確認及び、PDRが同じ異性関係である恋愛関係や異性友人関係とは、異質な性質を帯びた関係であろうという仮説のもとに、PDR、恋愛関係、異性友人関係における交際内容の比較検討をおこなった。

【方法】

予備調査

本研究の目的は、PDRが、異性関係として、恋愛関係や異性友人関係と異なる行動形態（交際内容）を有した関係なのかについて、恋愛関係及び友人関係で行われる具体的な交

際内容に照らし合わせ、PDRの交際内容を明らかにすることである。しかし、先述した通り、本邦では、PDRに関した研究が少なく、アメリカのように、本邦でもPDRが一般的に普及している関係なのか調べる必要がある。そのためにまず予備調査としてPDRの存在が、本邦で確認されるのかを調べた。2006年5月に大学生、専門学校生、計85名（男性29、女性56：平均年齢、20.5歳）を対象に、「付き合っていた異性とのその後の関係について」というテーマの質問紙調査を行った結果、今までに付き合っていた異性と別れたことがある、つまり失恋経験がある者57名（67.0%）で、そのうち、別れた異性と現在何らかの関わりがあると回答したのが24名（42.1%）であった。その結果からPDRがある程度普及している関係であると判断し、研究を進めた。

本調査

実施時期：2006年6月

「異性との交友関係についての調査」というテーマの質問紙調査を行った。調査協力者は、性別、年齢、交際経験の有無について尋ねられ、交際経験の有無によって、回答対象となる異性（現在、付き合っている異性と別れた異性、現在、付き合っている異性、別れた異性、家族以外の最も親しいと思われる異性）を選択するチャート式の質問に回答した。

調査協力者：大学生、専門学校生の計304名のうち回答に不備があった者、また、過去一ヵ月に想定した対象異性と全く交流がなかった者を除いた計249名（男性111名、女性138名、平均年齢19.6歳）であった。

質問紙の構成：1）性別、2）年齢、3）交際経験の有無（現在、異性と付き合っている、過去に付き合った経験がある、一度も付き合ったことがない）、4）恋愛関係の交際内容に関する質問：松井（2000）の恋愛の進行5段階17項目、5）友人関係の交際内容に関する質問：和田・廣岡・林（1986）の友人関係行動チェックリストを参考に作成した37項目について、交際経験の有無によって想定した対象異性との関係で過去1ヵ月に経験したかどうかの2件法で尋ねた。

【結果】

現在付き合っている相手がいると回答した67名を「恋人群」、過去に付き合っていた経験があり、その相手と現在何らかの関わりがあると回答した60名を「PDR群」、付き合った経験がないと回答した89名を「異性友人群」とし、計216名を分析対象者とした。尚、現在恋人がいてかつPDRがあると回答した33名は、双方の関係が相互に影響する可能性があると思われたので以後の分析から除外した。

次に、恋人群、PDR群、異性友人群の交際内容の構造特徴を検討するため、恋愛関係の交際内容項目と友人関係の交際内容項目のそれぞれに対して、216名のデータに基づいて数量化Ⅲ類を行った。また、各交際内容項目の出現頻度（%）を付表1に示した。

1）恋愛関係の交際内容に対する数量化Ⅲ類

恋愛関係の交際内容の構造を分析するために、17項目それぞれについて、過去1ヶ月の間に1度でも経験したか、経験していないかの2カテゴリーの計34カテゴリーを、数量化Ⅲ類で解析した。解析の結果、固有値は、順に0.453、0.078であった。

第Ⅰ軸は、各項目を「経験した」カテゴリーが負の、「経験していない」カテゴリーが正の分布をしたため、『経験の有無』を示す軸であると判断された。第Ⅱ軸は、「性交した」、「友人として周りの人に紹介した」、「キスしたり、抱き合ったりした」などの恋愛の進展度の深い項目が負の、「個人的な悩みを打ち明けた」、「相談を聞いてあげた」、「互いの家族の話をした」などの進展度の浅い項目が正の分布をしたため、『恋愛の進展度』の軸で

Table 1　カテゴリスコアのよる分散分析

恋愛関係の交際内容	恋人	PDR	異性友人	F 値	有意水準
第Ⅰ軸：経験の有無	-1.021(.657)	.501(.869)	.431(.684)	94.586	p＜.001
第Ⅱ軸：恋愛の進展度	-.365(.893)	-.247(.863)	.441(1.00)	17.140	p＜.001
友人関係の交際内容					
第Ⅰ軸：経験の有無	-.834(.823)	.481(.904)	.293(.790)	48.617	p＜.001
第Ⅱ軸：友人関係の交際内容	.173(1.182)	-.243(.869)	.035(.915)	2.874	p＜.059

注）恋愛関係の交際内容の第Ⅰ軸の正の値は、経験していないことを示し、負の値は、経験したことを示す。
恋愛関係の交際内容の第Ⅱ軸の正の値は、恋愛の進展度が浅いことを示し、負の値は、進展度が深いことを示す。
友人関係の交際内容の第Ⅰ軸の正の値は、経験していないことを示し、負の値は、経験したことを示す。
友人関係の交際内容の第Ⅱ軸の正の値は、Companionship 行動を示し、負の値は、Confidence 行動を示す。

あると判断された。付表２にⅠ軸とⅡ軸のカテゴリースコアを布置した結果を示す。次にⅠ軸、Ⅱ軸における調査協力者の分布を検討するために、各軸におけるカテゴリースコアを用いて一要因三水準の分散分析を行った。まず、Ⅰ軸において、１％水準で有意であった。多重比較（Bonferroni 法）の結果、恋人が PDR や異性友人と１％水準で有意差が見られた。同様に、Ⅱ軸においても、恋人と PDR、異性友人の間に１％水準で有意差が見られ、多重比較の結果、恋人・PDR と異性友人の間に差が見られた（Table１）。調査協力者のカテゴリースコアの散布図を示す（Figure１）。

２）友人関係の交際内容に対する数量化Ⅲ類

友人関係の交際内容の構造を分析するために、37項目それぞれについて過去１ヶ月の間に１度でも経験したか、経験していないかの２カテゴリーの計74カテゴリーを数量化Ⅲ類で解析した。解析の結果、固有値は、0.349、0.044であった。

第Ⅰ軸は、各項目を「経験した」カテゴリーが負の、「経験していない」カテゴリーが正の分布をしたため、『経験の有無』を示す軸であると判断された。第Ⅱ軸は、友人関係の交際内容の性質の違いを反映していると思われ、「一緒にコンサートや映画に行った」、「ドライブや日帰りの旅行に出かけた」、「一緒に昼食をとった」などの Companionship 行動に関する項目が正の、「第三者との議論でその人をかばった」、「いつもその人の気持ちを理解できた」、「その人の個人的な用事のためについていった」などの Confidence 行動に関する項目が負の分布をしたため『友人関係の行動』の軸であると判断された。付表３にⅠ軸とⅡ軸のカテゴリースコアの布置した結果を示す。

次にⅠ軸、Ⅱ軸における各関係の分布を検討するために、各軸におけるカテゴリースコアを用いて一要因三水準の分散分析を行った。まず、Ⅰ軸において１％水準で有意であった。多重比較の結果、恋人が PDR や異性友人と１％水準で有意差が見られた。Ⅱ軸においては、10％水準で有意傾向であった。多重比較の結果、恋人と PDR の間に10％水準で有意差が見られた（Table１）。各関係のカテゴリースコアの散布図を示す（Figure２）。

【考察】

本研究は、恋愛関係と異性友人関係との比較を通じて、本邦における PDR の存在の確認と恋愛関係や異性友人関係との異質性について明らかにすることを目的とした。その結果、PDR が恋愛関係や異性友人関係とは、

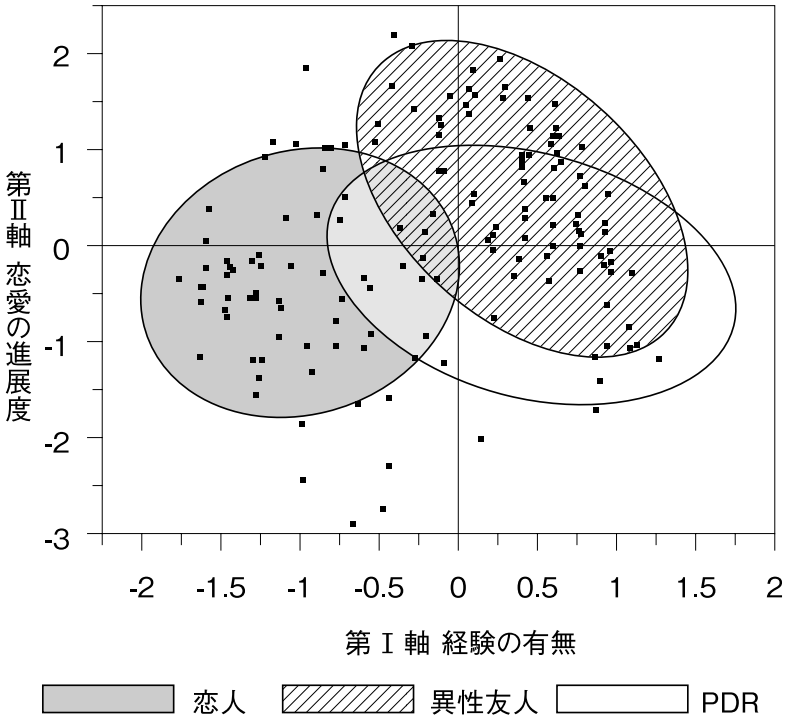


Figure 1　恋愛関係の交際内容に対する数量化Ⅲ類カテゴリースコアの散布図（信頼区間70%）

異なった性質を帯びている関係であることがとって見られ、仮説は支持されたと言える。以下、恋愛関係の交際内容、友人関係の交際内容別に結果を考察する。

1）恋愛関係の交際内容

恋愛関係の交際内容については、恋人群が、PDR 群や異性友人群よりも各交際内容を経験していた。つまり、経験している行動（交際内容）のレパートリーの多様さという点において、恋人は、PDR、異性友人と異なると言える。谷口（2004）は、互いに影響を及ぼしあう頻度（frequency）、互いに及ぼしあう影響の強さ（strength）、二人で行う行動の多様性（diversity）の 3 つの下位指標から関係の親密性を測定する尺度である RCI の妥当性を検討し、行動の多様性を含む RCI を構成するすべての行動特性で、恋人関係がそれ以外の異性関係（片思い、異性友人関係）よりも値が高くなるという結果を示している。この結果を考えると、恋人が PDR や異性友人といった異性関係よりも交際内容のレパートリーが多様であるという本研究で得られた結果は妥当なものであろう。次に、恋愛の進展度においては、異性友人群が、恋人群やPDR 群よりも進展度が浅く、恋人群と PDR 群は、進展度が深く、さらに恋人群と PDR 群の間には、進展度に有意な差が見られなかった。つまり、恋愛関係の進展度の浅深という点において、恋人と PDR は、同程度の深い進展度を有しているが、異性友人は、浅い進展度に留まっていることが伺える。この結果は、非常に興味深い示唆を与える。本研究で得られた進展度の深い極に配置された項目は、「性交をした」、「キスしたり、抱き合ったりした」、「手を握ったり腕を組んだりした」といった項目は、排他性の高い行為である。増田（1994）は、恋愛関係にある一組の男女を二者集団として捉え、その排他性と、二者集団としての存続可能性との関係について検討

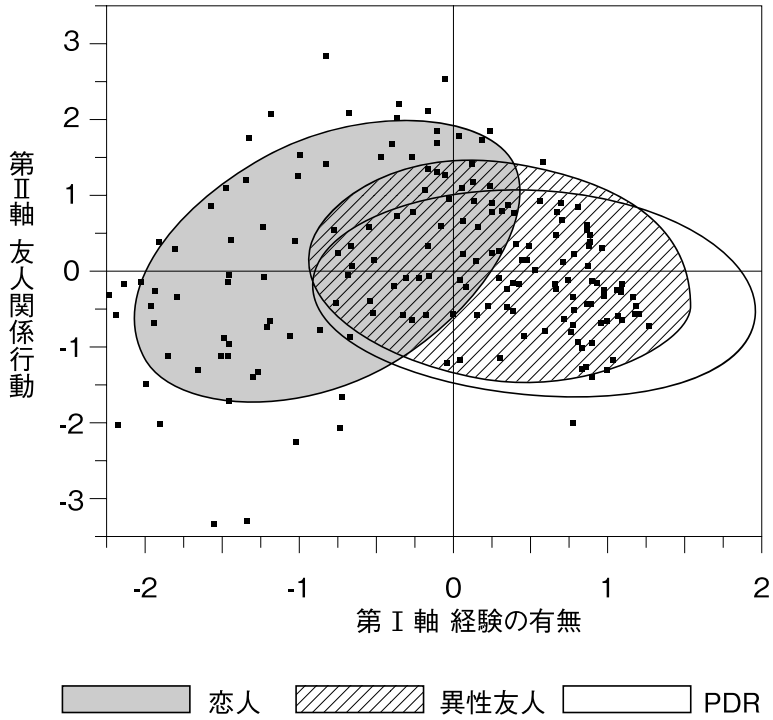


Figure 2　友人関係の交際内容に対する数量化Ⅲ類カテゴリースコアの散布図（信頼区間70%）

している。そして、排他性を測定するために、恋愛関係にある男女のそれぞれに対して「挨拶」から「キス」に至る15項目の行為群のうち、どの項目までが、二人の間のみで排他的に行われるべき行為であると認知しているかを調べている。これらの行為群の各行為は、「恋愛関係のみにおいて排他的に行われるべき行為」と「恋愛関係以外の関係においても許される行為」に分類され、最も親密な関係である恋愛関係でしか行わない行為（最も排他性の高い行為）から、最も親密性の低い顔見知り程度でも行う行為（最も排他性の低い行為）まで一次元で序列化することができるとしている。その中で、排他性の高い行為として、「お互いの家をひとりで訪ねる」、「肩や髪に触れる、触れられる」、「手をつないで歩く」、「抱き合う」、「キスをする」という行為を挙げている。また、金政（2006）は、青年期の愛着スタイルが恋愛関係における排他性に及ぼす影響について検討し、その中で、松井（1990，2000）の恋愛段階において経験される行動を参考にし、２因子からなる排他感尺度を作成している。第一因子は、「キスをする」、「セックスをする」、「二人でデートする」などの『性的・親密行動に対する排他性』、第二因子は、「友人や勉強の話をする」、「仕事や勉強の話をする」、「子どもの頃の話をする」、「仕事や勉強を手伝ってもらう」などの『コミュニケーション・共行動に対する排他性』であった。これらの研究で得られた排他性の高いとされる項目は、本研究の進展度の深い項目に対応しており、恋愛関係のみならず、PDR でも排他性の高い行為を経験していることが伺える。このような排他性の高い行為は、従来は、恋愛関係を特徴づける特有の行為として扱われてきたが、PDR のような関係においても特徴となりうる行為である可能性がある。また、これらの排他性の高い行為の経験は異性友人関係には見られず、PDR が、異性友人とは異質な関係であるこ

と、また、恋愛関係とは、類似した行動傾向をもつ関係であることが伺える。ただし、恋愛関係における排他性とPDRにおける排他性が同質のものであるとは限らず、排他性の高い行為の中でも恋愛関係のみに見られる行為、あるいは、PDRのみに見られる行為が存在する可能性がある。今後は、これらの点についても詳しく検討する必要があるだろう。

以上の結果を本研究の目的対象であるPDRに注目して解釈してみると、PDRは、経験している行動（交際内容）のレパートリーの多様性では、恋人と異なり、異性友人とは差はないが、恋愛の進展度の浅深においては、恋人と同様で、異性友人とは差が見られた。これらの差異は、恋愛に関連する行動（交際内容）の量と質においてPDRが他の異性関係とは異なる構造を持つ関係形態であることが言える。

2）友人関係の交際内容

友人関係の交際内容について、恋人群が、PDR群や異性友人群よりも各交際内容を経験していた。恋愛関係の交際内容同様、経験している友人関係の行動（交際内容）のレパートリーの多様性という点においても、恋人は、PDRや異性友人は、異なると言える。この結果は、先述した谷口（2004）の結果を考えると妥当な結果であろう。次に、友人関係の交際内容においては、有意傾向ではあるが、恋人群とPDR群の間に差が見られた。つまり、恋人関係は、全般的に、Companionship行動をとる傾向が見られ、PDRは、Confidence行動をとる傾向が見られた。これは、PDRという関係が公に認知されにくいため、Companionshipという他者の目に留まりやすい共行動は控え、Confidenceという信頼や情緒的な結びつきに基づく行動をとるためと考えられる。

ここから、PDRが、関係が崩壊したにも関わらず、元交際相手を信頼し、情緒的な結びつきを匂わす関係である可能性が伺える。しかし、この解釈には、注意が必要である。なぜなら、PDRにあるものすべてがそのような情緒的な結びつきを持っているとは限らないからである。石本・今川（2001）では、失恋後の行動として、「相手を恨んだり、怒りを感じた」、「屈辱感を味わった」、「相手を殺してやりたいと思った」など、ネガティブな行動が見られる。そういったネガティブな意思を持ってPDR関係を続けている場合、そこに情緒的な結びつきを想定しにくいからである。それでは、Confidenceな行動をとるPDRとは、どんなPDRか。それには、別れの原因や、別れの主導権、また、別れの際に使用した方略など、失恋時の状況が密接に関係してくると思われる。それらの要因についても、今後詳しく検討する必要がある。

【今後の課題】

本研究は、PDRについての探索的な検討を行った。その結果、PDRが、質的に恋人関係や異性友人関係とは異なることが示された。しかし、本研究には、いくつかの問題点が残されている。1つは、PDRの定義の問題である。本研究では、PDRを『恋愛関係終結後に同一パートナー同士で継続された結婚前の元恋人同士による友人関係』と定義しているが、実際には、別れた相手との関わりの有無のみを尋ね、PDRを選出している。一言に、PDRといっても、自発的に形成したか否か、PDRの関わりの程度についても様々であると推測できる。例えば、互いに同意の上で自発的に関わりを持っているPDRと一方は承認していないが関わりを持っているPDR、頻繁に会うPDRと年に1度しか会わないPDRとでは、その関わりの程度が異なると思われる。今後は、どのような意図があって、どの程度の関わりをPDRと持っているのかについても併せて検討する必要があ

る。

２つ目は、性差の問題である。本研究では、性差を考慮しないで、分析を行ったが、男性のPDRと女性のPDRでは、異なる性質を有している可能性がある。Hays（1985）は、大学生を対象に行った調査の結果から、同性の友人関係を発展させるものとして、男性の場合には、活動を共有することが重要であるのに対して、女性の場合には、自己開示が重要であると述べている。また、友人関係のこうした男女間の違いについて榎本（1999）は、男子は活動を共有することが中心であるのに対して、女子は親密な関係を作ることが中心であり、男女は異なった交友活動を形成していると述べている。この性差による交友活動の違いが異性関係にもみられ、PDRの在り方にも影響を与える可能性も考えられる。特に、本研究で得られた友人関係の交際内容の２極のCompanionship行動とConfidence行動は、まさにHays（1985）や榎本（1999）の性差による交友の違いを反映している結果かもしれない可能性がある。今後は、性別による異性友人と交友の違いとともに、PDRとの交友の在り方について検討する必要がある。

最後に、今後のPDR研究の展望を述べる。まず、PDR研究は、失恋研究に新しい視点を提供することができる。宮下（1991）は、失恋経験が与える様々な影響について述べ、「さらに青年期とりわけ大学生の時期にお互いの価値感や生き方にふれるような深い恋愛をした場合、失恋はその人にとってプラスにはたらくだろう」と失恋経験がその後の人生を豊穣にする可能性を示唆し、多くの先行研究でそのことが取り上げられてきた。確かに、交際期間中や関係解消直後の諸要因は、その後の人生や失恋からの回復に影響するであろうが、それは、過去の要因でしかなく、失恋後の要因ではない。失恋からの立ち直りには、失恋後のコーピングなど失恋後の要因が影響する。そして、どのようなコーピングを用いるかを選択する時、PDRとの関わりの有無が大きな影響を与えると思われ、そういった点で、PDR研究は、失恋からの立ち直りなどの失恋研究に影響を与えそうである。次に、PDR研究は、失恋のみではなく、Post-divorce relationshipの研究にまで拡張できる知見を提供できる。Hill et al.（1976）は、結婚前の関係は、結婚関係に特徴づけられる多くの同様の心理的絆を反映しているとし、結婚前の関係の分離過程は、結婚関係における分離の複雑なプロセスを解決する最初の段階で役立つと主張している。PDR研究は、失恋後の研究や離婚後の研究に大きな影響を与える研究テーマになると思われる。

引用文献

Ahrons, C.R.(1994). The good divorce：Keeping your family together when your marriage comes apart. New York：Harper Collins

Bell, R.R.(1981).Friendships of Women and of Men Psychology of Women Quarterly, 5（3）402-417

大坊郁夫（1988）．異性間の関係崩壊についての認知的研究　日本社会心理学会第29回大会発表論文集，64-65

榎本淳子（1999）．青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，47, 180-190

Foley, L. & Fraser, J.(1998). A RESEARCH NOTE ON POST-DATING RELATIONSHIPS：The Social Embeddedness of Redefining Romantic Couplings Sociological Perspectives, 41, 209-219

Hays, R.B.(1985). A Longitudinal Study of Friendship Development Jounal of Personality and Social Psychology 1985, vol.48, No.4, 909-924

飛田操（1997）．失恋の心理　松井豊（編）悲嘆の心理　サイエンス社　205-218

Hill, C., Rubin, Z.& Peplau, L.A.（1976）. 'Breakups Before Marriage：The End of 103 Affairs' Journal of Social Issues, 32, 1, 47-68

堀毛一也（1994）．恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル　実験社会心理学研究，34（2），116-128

石本奈緒美・今川民雄（2001）．青年期における失恋後の立ち直り過程　対人社会心理学研究,1，119-131

金政祐司（2006）．恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について　社会心理学研究，22（2），139-154

Kaplan, D.L &Keys, C.B（1997）．Sex and relationship variables as predictors of sexual attraction in cross-sex platonic friendships between young heterosexual adults Journal of Social and Personal Relationships, 14（2）, 191-206

加藤司（2005）．失恋ストレスコーピングと精神的健康との関連性の検証　社会心理学研究，20，171-180

警察庁（2010）．平成21年中における自殺の概要資料

栗林克匡（2001）．失恋時の状況と感情・行動に及ぼす関係の親密さの影響　北星学園大学社会福祉学部北星論集，38，47-55

黒崎充勇ら（2008）．キャンパスライフにおける対象喪失―失恋の行方を占うもの―　総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集，24,1-8

Lannutti, P.J. &Cameron, K.A.(2002). Beyond the Breakup：Heterosexual and Homosexual Post-Dissolutional Relationships Communication Quarterly, 50（2），153-170

松井豊（1990）．青年の恋愛行動の構造　心理学評論，33，355-370

松井豊（2000）．恋愛段階の再検討　日本社会心理学会第41回大会発表論文集，92-93

増田匡裕（1994）．恋愛関係における排他性の研究　実験社会心理学研究，34，164-182

増田匡裕（2001a）．以前の恋人との友人関係（PDR）と新しい恋愛関係の交渉と葛藤についての探索的研究―対人関係の正当性に関するフォーク・サイコロジー―　日本社会心理学会第42回大会発表論文集，250-251

増田匡裕（2001b）．対人関係の「修復」の研究は有用か　対人社会心理学研究，1，25-36

増田匡裕（2006）．恋愛関係解消後の友人関係承認のためのアカウント作成コミュニケーション（1）オーディエンス・アナリシス（その１）　日本社会心理学会第47回大会発表論文集，118-119

Masuda Masahiro（2006）．Perspectives on Premarital Post-dissolution Relationships：Account-Making of Friendships Between Former Romantic Partners Handbook of Divorce and Relationship Dissolution　113-132

Metts, S., William R. Cupach&Richard A. Bejlovec（1989）．'I LOVE YOU TOO MUCH TO EVER START LIKING YOU'：REDEFING ROMANTIC RELATIONSHIPS Journal of Social and Personal Relationships, 6　259-274

宮下一博・臼井永和・内藤みゆき（1991）．失恋経験が青年に及ぼす影響　千葉大学教育学部研究紀要，39，117-126

Schneider, C.S. &Kenny, D.A.（2000）. Cross-sex friends who were once romantic partners：Are they platonic friends now? Journal of Social and Personal Relationships, 17（3）451-466

谷口淳一（2004）．RCI の改訂と妥当性についての検討―RCI で測定される関係の親密さとは？―　対人社会心理学研究，4，55-66

和田実・廣岡秀一・林文俊（1986）．大学生の交友関係の進展に関する研究（１）　日本社会心理学会第29回・日本グループダイナミックス第34回合同大会発表論文集，73-74

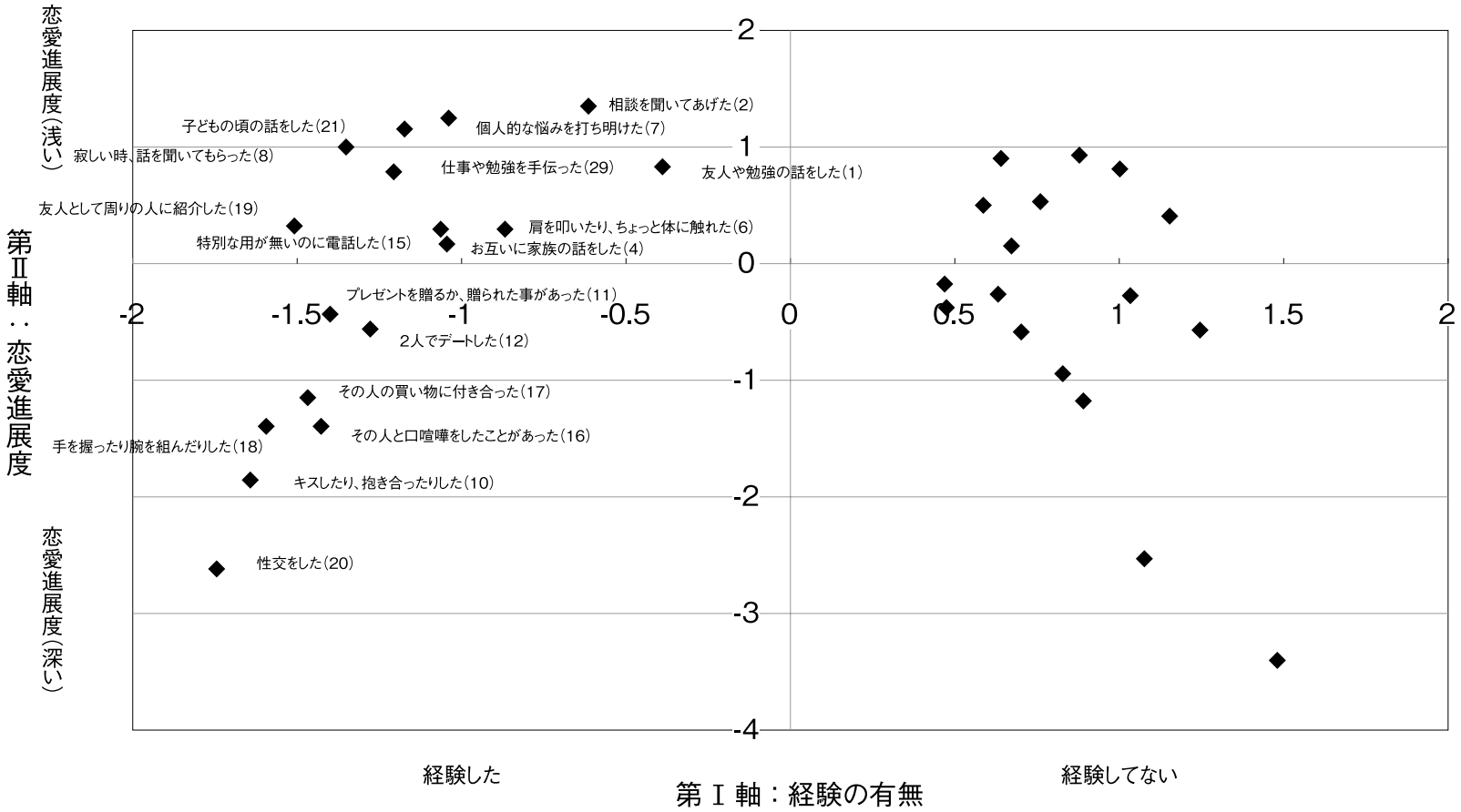
和田実（2000）．大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応―性差と恋愛関係進展度からの検討　実験社会心理学研究，40，38-49

Wilmot, W.W., Carbaugh, D.A. & Bayter, L.A.（1985）．'Communicative Strategies Used To Terminate Romantic Relationships' Western Journal of Speech Communication, 49，204-216

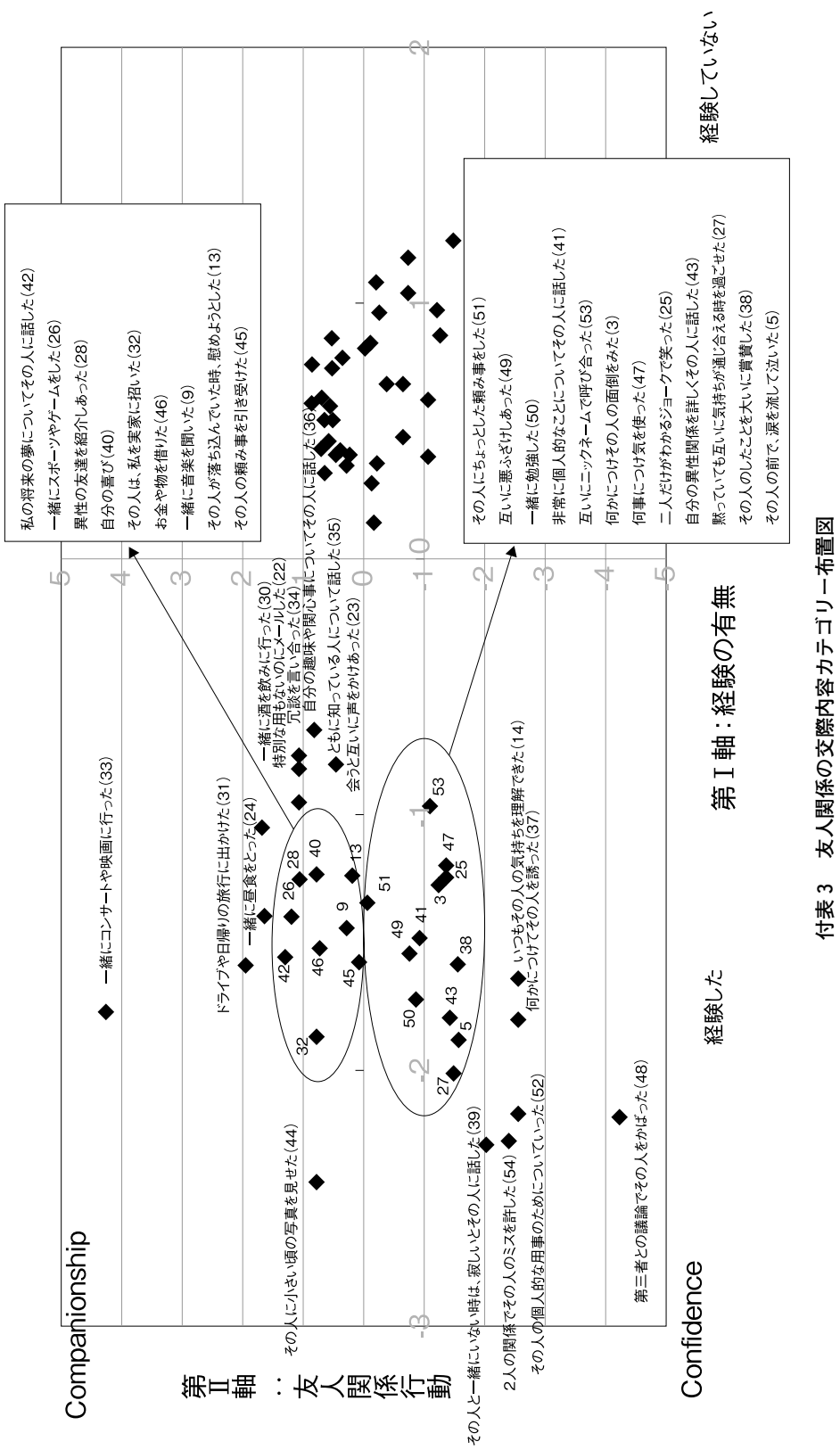
山下倫実・坂田桐子（2008）．大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連　教育心理学研究，4，57-71

付表１　行動項目の出現頻度（％）

	恋人	PDR	異性友人
友人や勉強の話をした	100	60.0	77.5
相談を聞いてあげた（聞いてもらった）	83.6	48.3	60.7
何かにつけその人の面倒をみた	52.2	30.0	20.2
お互いの家族の話をした	88.1	28.3	36.0
その人の前で、涙を流して泣いた	37.3	5.0	14.6
肩をたたいたり、ちょっと体にふれた	92.5	33.3	51.7
個人的な悩みをうちあけた（うちあけられた）	74.6	30.0	37.1
さびしい時、話をきいてもらった	62.7	18.3	24.7
一緒に音楽を聞いた	83.6	18.3	24.7
キスしたり、抱き合ったりした	83.6	21.7	7.9
プレゼントを贈るか、贈られたことがあった	62.7	21.7	18.0
二人でデートした	92.5	30.0	25.8
その人が落ち込んでいた時、慰めようとした	77.6	30.0	37.1
いつもその人の気持ちを理解できた	35.8	15.0	15.7
特別な用がないのに電話した	59.7	28.3	28.1
その人と口喧嘩をした	61.2	23.3	10.1
その人の買い物につきあった	71.6	21.7	15.7
手を握ったり、腕を組んだりした	89.6	20.0	13.5
友人としてまわりの人に紹介した（紹介された）	43.3	8.3	20.2
性交した	71.6	10.0	5.6
子どもの頃の話をした	70.1	16.7	38.2
特別な用もないのにメールした	82.1	43.3	38.2
会うと互いに声をかけあった	85.1	36.7	58.4
一緒に昼食をとった	80.6	21.7	27.0
二人だけがわかるジョークで笑った	68.7	31.7	22.5
一緒にスポーツやゲームをした	58.2	15.0	29.2
黙っていても互いに気持ちが通じ合える時を過ごせた	62.7	11.7	13.5
異性の友達を紹介しあった	11.9	13.3	13.5
仕事や勉強を手伝った（手伝ってもらった）	43.3	23.3	22.5
一緒に酒を飲みに行った	50.7	26.7	38.2
ドライブや日帰りの旅行に出かけた	46.3	10.0	18.0
その人は、私を実家に招いた	35.8	13.3	7.9
一緒にコンサートや映画に行った	43.3	10.0	9.0
冗談を言い合った	92.5	40.0	66.3
ともに知っている人について話した	94	46.7	67.4
自分の趣味や関心事についてその人に話した	83.6	41.7	49.4
何かにつけその人を誘った	44.8	13.3	20.2
その人のしたことを大いに賞賛した	46.3	13.3	24.7
その人と一緒にいない時は、寂しいとその人に話した	49.3	8.3	6.7
自分の喜びをその人に知らせた	77.6	30.0	34.8
非常に個人的なことについてその人に話した	61.2	23.3	30.3
私の将来の夢についてその人に話した	56.7	18.3	22.5
自分の異性関係を詳しくその人に話した	25.4	11.7	16.9
その人に小さい頃の写真を見せた	23.9	5.0	6.7
その人の頼み事を引き受けた	55.2	21.7	30.3
お金や物（CD、ノートや車など）を借りた	59.7	16.7	21.3
何事につけ気を使った	37.3	23.3	22.5



付表 2　恋愛関係の交際内容カテゴリー布置図



付表 3　友人関係の交際内容カテゴリー布置図